

ハノイにおける活動報告

大学院博士課程 加藤隼悟

2015年3月1日から約4週間ほどベトナム・ハノイに滞在し、現地における研究活動や感染症専門病棟の診療について学ぶ機会があったので、以下に報告する。

例えば2009年度に熱研内科から2ヶ月間フィリピンのサンラザロ病院で感染症研修に行かせて頂いたのが、初めての臨床熱帯医学経験でした。あの時は英語でのコミュニケーションの難しさと、貧困と感染症の入り組んだ臨床現場における自分の無知無能さを痛感するばかりでした。その際にプライマリケア能力、総合診療力の重要性を再認識し、2年間北海道の江別市立病院総合内科で勉強させて頂きました。同時に英語の勉強にも苦しみながら挑み続け、去る9月によりやくLSHTMに滑り込むことができました。

今回の滞在は自分にとって初めてのベトナム訪問であり、何もかもが新鮮な経験であった。主な訪問目的は2つあり、ハノイのバックマイ病院感染症科(Infectious Disease Department: IDD)において原因が明らかでない発熱を主訴に受診した患者群(Undifferentiated fever patients)の検討を行う研究に参加すること、長崎大学ベトナム拠点のあるNational Institute of Hygiene and Epidemiology (NIHE)の研究室で前述の Undifferentiated fever patients の血液検体を用いて buffy coat から DNA 抽出する作業を学び、お手伝いすることであった。いずれも初体験であったため、まずは現地の研究者や臨床医達に対して自分が何者で、今後どういう風にハノイでの研究に関っていけるかをお伝えし、広く人間関係を構築することも重要な目的の一つであった。

現地での滞在は当科の大学院生であり、バックマイ病院 IDD のスタッフでもあった Dr. Cuong の紹介で親切なご夫婦のお宅にホームステイさせて頂いた。到着するなりタクシーでおつりをごまかさそうになりつつ、貧乏旅行に慣れていた過去を思い出して必死でおつりをしっかり確保したものの、後になって自分がこだわった金額はたかが百数十円であることに気が付き、気恥ずかしくなった。不慣れた土地ではあったものの、NIHE の Pneumococcus labo のスタッフや、長崎大学ベトナム拠点の先生方に親切にして頂き、衣食住を充実させていくことができた。更に、バックマイ病院 IDD の先生方には非常に良くして頂き、ベトナムの旧正月(テト)明けの初詣ツアーや近郊の伝統的生活様式の村、伝統工芸品(陶磁器)が有名な村など、北部ベトナムの文化にも触れられるように様々な所へ連れて行って頂いた。その国の歴史や文化を知り、人々と近づくことは国際的に活動する上では必須とと思っているので、非常に有難い経験であった。

この他にも、ベトナム拠点長の山城先生のお取り計らいで、長崎大学医学部学生のベトナム拠点研修に数日同行させて頂き、幸運にも WHO country office や JICA プロジェクトでハノイに滞在されている専門家の方々と出会うこともできた。学生と一緒に病院訪問をしつつ、熱帯医学を学ぶ感染症科の医師として学生に多少の知識をひけらかしたり、訪問先の現地医師と興味深いディスカッションをさせて頂いたりして、出会いと経験の幅が一層広がった。皆様の優しさに甘えて贅沢な経験をしたと思う。

当初の目的以外の事柄も数多く経験した訪問であったが、主たる目的であるバックマイ病院のIDDでは連日カンファレンスに参加し、回診で感染症症例を検討し、しばしば現地医師にアドバイスを求められることもあり、身の引き締まる思いをすることが多かった。好酸球性髄膜炎、トキソプラズマ脳症、マラリア（渡航症例）、ペニシロオーシスなど稀な症例もあったが、多くは肺炎、細菌性髄膜炎、带状疱疹、HIV関連日和見感染など日本でも見かける疾患であった。しかし、病原体の確定がなかなか徹底できず、経験的治療に終始せざるを得ないこともしばしばあり、院内感染では多剤耐性菌の問題が大きくなってきているという状況もあった。様々な問題点を実際に感じられたことは大きな収穫であったが、実は本来の目的としていたリケッチア、レプトスピラ感染症など、診断されていない発熱性疾患の症例を見るという目的は達成できなかった。季節性があるそうだが、こういった病原体はプライマリケアの現場で経験的抗菌薬治療によって治癒してしまうことが多いとのことであった。このあたりは、当研究チームが収集したデータを綿密に解析していく際に重要な点である。今後の研究を通して、今回現場を見た印象をふまえて検討していきたい。NIHEにおける作業はチームワークを構築して日に日に素早くなり、Pneumococcus laboのメンバーとはとても良い関係が築けた。最終日には日本製電気炊飯器の使用マニュアル作成というミッションを果たし、ようやく何か役に立てたような気がした。

今回のハノイ滞在期間中は当科の病棟業務を離れることになり、ご迷惑をおかけしたと思う。しかし、快く送り出して頂き、この機会の前後も通して大きなご支援を頂いたことは、熱研内科の皆様に深く感謝申し上げます。家で一人で留守番してしてくれた妻にも感謝しつつ、いろいろお土産持って帰ってご機嫌とれただろうと思いたい。はからずも、人のありがたさを改めて実感する良い機会であった。